

プロバスケットボールBリーグが取り組む地域活性化に関する調査 —茨城の調査—

Research about the Regional Activation of The Professional Basketball B League Case Study of IBARAKI

伊 藤 優 子

1. はじめに

現在の日本では、多くのプロスポーツが存在している。しかしかつてはプロとして存在するスポーツは相撲、野球、ゴルフなど数少ないものであった。今回は2016年に団体スポーツとしては野球、サッカーに次ぐ3番目になるプロスポーツであるバスケットボールのBリーグについて調査を行った。Bリーグはバスケットボールというスポーツの競技力をアップさせるだけを目的とするものではなく、エンターテインメント性や地域との連携を図る目的を掲げている。今回は地域に根付いた活動をしているチームの取り上げ、調査を行った概要を報告する。

2. Bリーグ誕生の概要

バスケットボール日本リーグは1967年から30年弱のあいだ、実業団リーグとして活動した。企業の部活動の一環の扱いで、バスケットボール普及のために全国各地の体育館で試合を実施していた。これはほかのスポーツも実業団リーグがあり、企業に所属するスポーツクラブであり、企業に所属するスポーツ選手であった。バスケットボールは世界最高峰のアメリカのプロバスケットボールであるNBAや大学バスケットボールNCAAが日本のみならず、世界中で人気がある。また1990年には漫画の「SLAM DUNK」の連載が開始し、日本でのバスケットボール人気に火をつけた。1992年のバルセロナオリンピックでは初めてアメリカNBAのプロバスケットボール選手の参加が認められ、当時、世界中で爆発的人気のあったマイケルジョーダンをはじめとして、マジックジョンソン、ラリーバード、スコッティピッペンなど多くのスーパースターがオリンピックの現場に集った。当時、旅行会社の一員だった著者は、オリンピックのアテンドをするためにバルセロナに1か月滞在し、仕事をしながらその熱狂ぶりを肌で感じてきた。

一方、日本は1996年からプロ化に向けた活性化リーグであるJBLが発足した。しかし、エンターテインメント性を主張するものとあくまでも企業に依存する側との対立で、2つのリーグが存在することになる。2013年からJBLはNBLとして日本を代表するチームを中心に運営した。また2005年からはエンターテインメント性を前面にだす親会社のないプロリーグであるbjリーグが始動した。つまり日本のバスケットボール界は2リーグに分裂するといった異常事態になった。この状況はなか

なか解消されぬままbjリーグは10年を迎えることになる。

国際バスケットボール連盟はこの不適切な状況を良しとはしなかった。国際資格停止処分が下されたのだ。日本はこのままいくと国際大会にいっさい出場することが認められない。オリンピックが開催されることが決まり、いよいよ深刻な問題となってきた。そこでこの不均衡な状況を打破するためにプロサッカーリーグJリーグを誕生させた川淵三郎氏を迎えBリーグ発足へと動き出した。

2016年秋にBリーグが誕生した。1部は東地区、中地区、西地区それぞれ6チームの合計18チームで構成された。2部も同様に東地区、中地区、西地区6チームの合計18の構成チームだ。1部、2部の合計で初年度は36チームが参加することになった。北は北海道から南は沖縄まで日本全国に広がるチーム編成である。

3. 2022-23シーズンのBリーグの現状

2022年9月に、2022-2023シーズンがスタートした。発足から7シーズン目となる。7シーズンを迎えたBリーグの現状をまとめる。毎年、チーム数が増え、47都道府県に存在しなかったところもチームが誕生している。1部は東地区、中地区、西地区各8チーム、合計24チーム、2部は東地区7チーム、西地区7チームの14チームである。3部まで入れると、新加入の5チームがあり合計16チームとなる。1部から3部までで54チームがあり、来シーズンも新加入のチームがある見込みだ。今までチームがなかった都道府県も今後、加入していくことは予想される。

今シーズンは1部、2部、3部の昇格や降格があるため、各都道府県のチームはより上を目指して臨むシーズになってくるだろう。

4. 茨城ロボットの概要

各チームはバスケットボールのレベルアップ、チームの順位を上げるのはもちろんのこと、地域住民、地域企業、自治体などとの連携が求められてくる。

今回は茨城県水戸市に本拠地を構える、茨城ロボットについて整理する。

(1) 茨城県の概要

茨城県は北関東にあり、太平洋に面し、北は福島県、西は栃木県に接し、南は千葉県、埼玉県があり、首都圏から県南の取手市で40キロメートル、に位置している。常総平野が広がり、最南端を流域面積全国1の河川利根川が合流し、太平洋に注ぎ込んでいる。南東部は、日本で2番目に広い湖、霞ヶ浦があり、水郷地帯で、面積は全国24位ながら、可居住面積は全国第4位となっている。

(2) 水戸市の概要

東京から100キロメートル圏内にあり、関東平野の北東部に位置する茨城県の県庁所在地である。太平洋岸式気候であり、冬の寒さの厳しい1月にはマイナスの温度になることもあるが、それを除

き、比較的温かな気候である。人口は2021年10月1日、270,450人で、茨城県内で第1位の人口である。人口が280万人の茨城県の9.5%が水戸に住んでいることになる。北関東のなかでもアクセスのいい水戸市でも少子・高齢化は進行しているのが現状だ。産業について見てみると、第3次産業の割合が86.5%を占めている。卸売業・小売業が26.7%、宿泊業・飲食サービス業は12.6%、生活関連サービス業・娯楽業は9.5%となっている。農業を中心とする第1次産業は減少を続け、1975年には9.3%であったが、2015年には2.6%となり激減している。日本全体での課題が水戸市にも存在するのが現状だ。

(3) 茨城ロボットの概要

クラブ正式名称は茨城ロボットであり、クラブ創設は2013年7月1日である。2020－2021シーズンにBリーグ2部から1部に昇格し、1部チームとしては2年目になる。2022－2023シーズンでは東地区8チームに所属している。ホームタウンは茨城県水戸市で、クラブ保有法人は株式会社茨城ロボット・スポーツエンターテインメントである。

茨城ロボットのクラブ名の由来はクラブ発祥の地であるつくば市は「ロボットの街」を推進しており、そこから愛称を「ロボット」とした。現在のロボマークは2016年から使用されている。ロボマークのデザインコンセプトは力強くスピードがあり、ロボットを表現する近未来のイメージで作られ、グッズなどに利用しやすいデザインとなっている。チームカラーは茨城の豊かな自然や輝かしい未来を表現したいばらきブルーと茨城ロボット発祥の地であるつくば市の名産品である「福来（ふくれ）みかん」に由来するつくばオレンジを使用している。

(4) 茨城ロボットの沿革

茨城ロボットが誕生した沿革を表にまとめた。

表1 茨城ロボットの沿革（茨城ロボットホームページより筆者作成）

年 月	概 要
2013年7月	つくばロボット創設 日本リーグ（NBL）に参入
2014年10月	創設当初の運営会社破綻により、日本リーグの管理下に置かれる
2014年12月	日本リーグより新運営会社に参入権移管
2015年7月	クラブ正式名称を「サイバーダイナミックつくばロボット」に変更
2015年8月	Bリーグ2部参入決定 ホームタウンを「つくば市・水戸市を中心とする茨城県」に変更
2016年4月	堀義人氏が取締役就任
2016年9月	Bリーグ開幕
2017年9月	まちなか・スポーツ・にぎわい広場（M-SPO）開設
2019年4月	水戸市アダストリアみとアリーナ開館 開館記念日に観客動員数Bリーグ2部 5,041名記録更新
2019年7月	クラブ正式名称をサイバーダイナミック茨城ロボットから「茨城ロボット」に変更
2020年6月	第3回日本ビジネス大賞ライジングスター賞受賞
2021年5月	Bリーグ1部昇格

(5) 茨城ロボットのミッション

茨城ロボットが事業を行う上での使命＝ミッションは「スポーツ・エンターテインメント・メディアにより夢・誇り・活力を生み出し、プロスポーツを中心とするさまざまな事業を通じて、地方創生のさきがけモデルをつくる。」このミッションを実現するために、仕事に取り組み、成果を生み出していく。会社の売上とはミッションに対する市場や顧客からの共感の総量であり、利益とはこのミッションを持続させ充実させるための原資である。ミッションを実現していくための基準や価値観を以下の通り示している。

1. ポジティブに楽しもう
2. お客様の立場で考えよう
3. 「勝ち」を目指そう
4. 成長し続けよう
5. チャレンジしよう
6. ユニークネスを大切にしよう
7. 感謝の気持ちをこめよう

ミッションを実現するため仕事に取り組むうえで常に意識すること、行動するうえで指針とすることは以下のとおりである。

1. チームワークを大切にすること
2. プロであること
3. 良いコミュニティづくりに貢献すること

(6) カリスマ経営者兼茨城ロボットオーナー

茨城ロボットのオーナーである堀義人氏は茨城県出身である。水戸一高から京都大学を卒業し、ハーバード大学経営大学院修士課程修了（MBA）を修得した。ハーバード大学経営大学院では株式会社ディー・エヌ・エーを設立し、代表取締役社長（現在は代表取締役会長）に就任、横浜ベイスターズのオーナーになり、日本では女性初の日本経済団体連合会の副会長に就任した南場智子氏とは同窓生である。堀氏は住友商事勤務を経て、1992年株式会社グロービスを設立した。2006年にはグロービス経営大学院を開学し、学長に就任した。2016年には株式会社茨城ロボッツスポーツ・エンターテインメントの取締役に就任、2019年には株式会社茨城放送の取締役に就任している。2019年に慶応大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科と日本経済新聞社主催の「Bリーグの挑戦」という特別カンファレンスでは、DeNA代表取締役会長である南場智子氏と堀義人氏が第2クォーターのオーナーシップ論「なぜ、オーナーになったのか？」で語り合った。堀氏はその際に、「水戸市に戻ったら、街には通行客が激減し、活気がなく、廃墟となったビル、シャッター街のまちなかの様子を衝撃を受けた。これは水戸市を何とか盛り上げていかないといけないと考えた。まちのど真ん中を再生させたい。」という言葉だった。

堀氏は地元を何とかしたい、かつての活気を取り戻したいという強い意志をもって、破綻した茨

城ロボットの再生に乗り出した。茨城ロボットの経営だけでなく、グロービス経営大学院の経営、空き地を活用し、まちなか・スポーツ・にぎわい広場、M-SPO（以下、M-SPOと記載する。）（写真1）の開設など水戸市、茨城県全体の活性化にチャレンジしている。

(7) 地域との取り組み

堀氏が取り組むグロービス経営大学院は、地域チームを担う人材育成を行っている。経営学修士（MBA）のカリキュラムにスポーツマネジメントの講座を加えた内容となっている。スポーツ界に不足しているのは、チームの経営戦略を考え、実行する人材だと言われている。地域スポーツを根付かせるためにも人材育成が必須と考え、チーム運営や経営に必要なスキルを修得する。またスポーツ選手はプロとしての選手人生終了後のセカンドキャリアを支援するという意味もある。

M-SPOは地域の人のにぎわい創出としての場を提供する。室内競技場ではバスケットボールもできるようになっているため、茨城ロボットの練習の場でもあり、茨城ロボットの下部組織であるジュニアユースのチームが使用している。施設が整っていない地域では練習の場所を確保するのが大変な状況である。静岡をホームタウンとするベルテックス静岡でも専属アリーナや体育館がないため、コロナ渦では練習場所の確保に四苦八苦していた。その点、水戸ではM-SPOの存在がプレーヤーにも安心できる場所となっている。地域の人の利便性を考え、ユニバーサルデザインのトイレを用意し、誰でも安心して利用できる場所を提供している。（写真2）グロービス経営大学院もM-SPOの一角で学びの場を確保している。

水戸市だけでなく、茨城県全体の魅力を発信するために、地域との連携イベントや地域の特産品販売を行っている。筆者が訪れたときは、茨城名物「あんこう鍋」の吊るし切りを行っていた。（写真3）地元の調理人があんこう1匹をまるごと解体するイベントである。あんこう鍋は食したことがあっても解体を見る機会がない。これは地元の人にとっても、また対戦相手のファンにとっても興味深いものであった。

特産品は茨城の特産である梅を活用した梅シロップや海に面した大洗の海産系の特産品がグッズとともに並べられ、地域の魅力をアピールしていた。

5. おわりに

Bリーグは日本全国にチームがあり、バスケットボールの普及、底上げを行っているが、それだけではなく、我がチームという感覚で地域にあるスポーツチームとして、自治体、地元企業は当然ながら、そこに住む住民との連携が重要となる。茨城ロボットは堀義人氏のようにリーダーシップとカリスマ性を備えた人物が主導し、茨城ロボットを活用しながら地域の活性化の一役を担っている。

また早い段階で、アダストリアみとアリーナ（写真4、写真5、写真6）を建設したのは特筆すべきことだ。Bリーグは体育館ではなく、アリーナ建設を使命として掲げている。Bリーグでは使

命として「夢のアリーナを作り、地域に根差したスポーツクラブになっていく、非日常の空間を存分に楽しめる…試合を楽しむだけでなく、スポーツを通して人生を楽しむことができるような環境を提供し、B.LEAGUEを盛り上げて参ります。」¹としている。

アリーナ建設がより地域の人々が集う交流の場として重要になり、さらには他地域から来訪する人々との交流の場になるだろう。今回は茨城ロボットの調査を行ったが、調査半ばとなった。引き続き調査を続けると同時に他のチームの違った側面からBリーグの取り組みについて調査を続ける。



写真1：まちかど・スポーツ・にぎわい広場 (M-SPO) (本人撮影)



写真2：ユニバーサルデザインのトイレ (本人撮影)



写真3：あんこうの吊るし切り (本人撮影)



写真4：アダストリアみとアリーナ正面 (本人撮影)



写真5：アダストリアみとアリーナ入口 (本人撮影)



写真6：アダストリアみとアリーナ内部 (本人撮影)

引用

- 1 Bリーグホームページ bleague.jp/about/ Bリーグの使命

参考文献/参考サイト

堀義人『創造と変革の技法』(2018) 東洋経済新聞社

茨城県庁ホームページ <http://www.pref.ibaraki.jp>

水戸市 令和4年版 水戸市概要

茨城ロボットホームページ <http://www.ibarakirobots.win>